

みんなの  
会津型  
プロジェクト

記録集

R7

令和7年度 喜多方市文化芸術創造都市推進事業  
「つながる」みんなの会津型プロジェクト

喜多方市  
文化芸術  
創造都市  
推進事業



# みんなの 会津型 プロジェクト 記録集

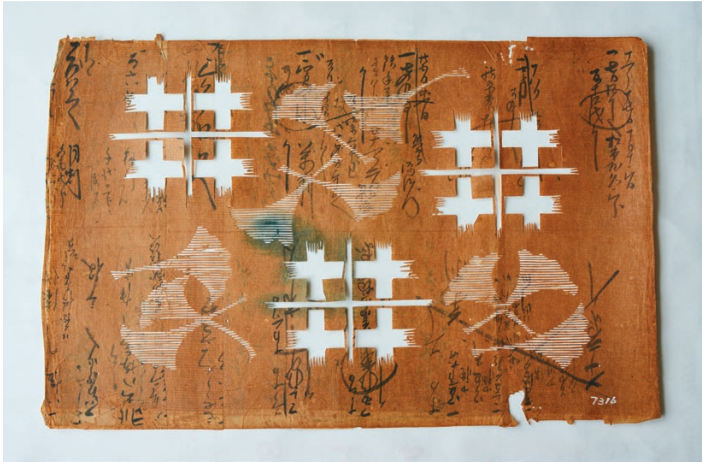
この本は、喜多方市文化芸術創造都市推進事業として、令和5～7年度にかけて「会津型デザインの活用」をテーマに展開してきた「みんなの会津型プロジェクト」をふりかえる記録集です。平成15年に福島県重要有形民俗文化財に指定された「喜多方の染型紙『会津型』」は、紋柄のスキヤンデータをどなた

にでも活用していただけます。その活用の可能性を広げる事業の取り組みのご紹介と、そこから生まれた次の展開までをまとめます。喜多方市の文化事業はどんなことをやっているの？と知っているあなたや、自治体の文化財活用に興味のあるあなたの参考になれば幸いです。

Project  
AIZU-KATA  
for All

喜多方の染型紙「会津型」（福島県指定重要有形民俗文化財「会津の染型紙と関係資料」）は、江戸後期から昭和初期（一七八九頃～一九三五頃）にかけて、喜多方市内の小野寺家を通じて販売・製造されました。染型紙とは、数枚の和紙を柿渋で貼り合わせた「渋紙」に彫刻刀で柄が彫られたもので、主に布などに柄を染め出すために使われる道具です。

小野寺家は、染型紙の販売網を東北一円に広げますが、昭和10年代には型紙商としての歴史に幕を閉じます。小野寺家の蔵に残された染型紙や関係資料など約三万七千点は市へ寄贈され、調査・整理等を経て、平成15（二〇〇三）年に福島県の文化財に指定されました。



会津型は、かつての喜多方の暮らしを垣間見せてくれます。柄、素材、技術、歴史、さまざまな視点から背景にある物語を紐解くと、美しさ、おもしろさ、奥深さといった感動に出会わせてくれます。

## 小野寺家による 型紙「販売」・「製造」の歴史

### 「販売」の歴史

小野寺家本家の墓碑（岩月町稲田）には「形屋」など一見して職業のわかる戒名が彫られています。最も古いもので寛政期（一七八九～一八〇〇）に遡るため、この頃にはすでに型紙商人としての歴史が始まっていると考えられます。

### 「製造」の歴史

小野寺家は、「形屋」として伊勢型紙※の仕入れを行う一方、型紙の「製造」にもあたってきました。いつからその歴史が始まったかは定かではありませんが、次の記録から自家製の型紙や型紙彫師の存在が見えてきます。

小野寺家蔵の文書には、安政3（一八五六）年に同家が例年通り仙台領で型紙の商いをしようとしたところ、その荷を差し押さえられたことが記されています。仙台藩では、その前年に自国の型紙産業振興を図るため、伊勢を除く他国製造の型紙の販売を禁止しており、特に会津と越後を名指ししている

ことから、少なからず会津産の型紙の存在を認識していたと考えられます。荷を差し押さえられた際、小野寺家が「伊勢型紙と地型（会津型）では雲泥の差があり、会津産の型紙は持ち込んでいない」と主張したのは、とても興味深いエピソードです。

また、安政4（一八五七）年に小野寺家が会津藩の御用達を拜命した際、その祝宴に「形切八次郎」という人物を招いています。「形切」は型紙彫師のことであると考えられ、これらのことから遅くとも19世紀半ばには型紙の「製造」も行っていたことが推察されます。

※伊勢型紙：江戸時代中期に現在の鈴鹿市白子・寺家地方が紀州藩領となつて以降、伊勢型紙販売商人たちは藩への莫大な貢加金の献上と引き換えに行商上の数々の特権を得て、江戸時代後期に質・量ともに最盛期を迎えます。この独占体制は明治時代以前まで続き、伊勢型紙は全国の染屋に結びついた行商により、発展していきました。明治時代以降、素材や技法の様々な技術革新に伴い、その時々の嗜好や流行に合わせて大きく変化していません。

# 「身近に文化財をたのしむまち」 のはじまり

京都や金沢、鎌倉、松本、尾道など、歴史を大切にしている街を思い浮かべると、その街の名前とともに象徴的な風景や文化が浮かびます。まちの歴史を語るものが日常に溶け込み、それを大切にする気持ちが共有されている状態です。

「30年後」という時間をあえて具体的に設定し、そこから20年後、10年後、5年後へと逆算していくと、必要な取り組み

企画にあたり、まず「会津型が活用されている30年後のまち」を具体的に思い描くことから始めました。文化財を活用するとはどういうことか。文化が大切にされているまちとはどんな姿か。

古い建物をリノベーションしたカフェや、小さな劇場があり、会津型のかわいらしい柄がお土産のデザインや街なかの装飾に使われている。そうした風景を想像しました。会津型から出発し、やがて地域のさまざまな文化資源へと発想が広がっていききました。

みも見えてきました。例えば、小中学校で会津型の講座を継続すること。子どもたちが学び続けることで、大人になったとき、まちの中で会津型を見つけてうれしく感じる未来が想像できます。それには、活用を進めるだけでなく、教育分野との連携が必要です。

こうした議論を経て、見えてきた大きな軸は、「文化財としての価値を損なわないこと」と、「デザインの活用を他分野へ広げること」のふたつでした。

# Redesign

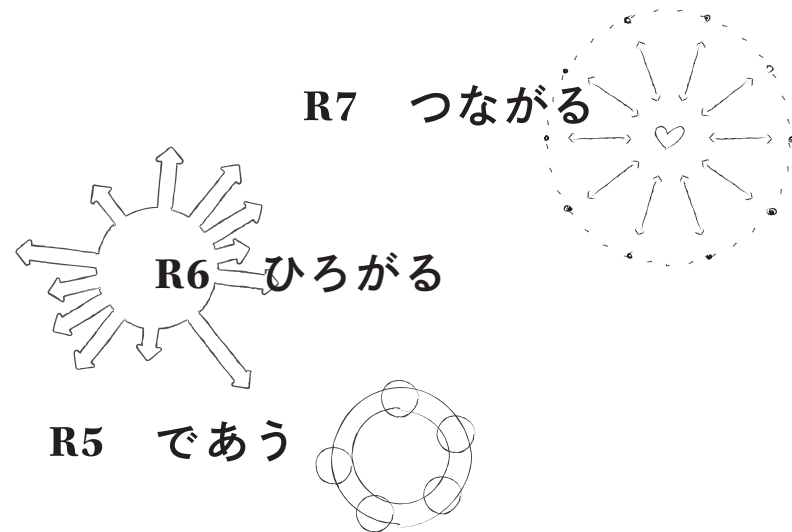
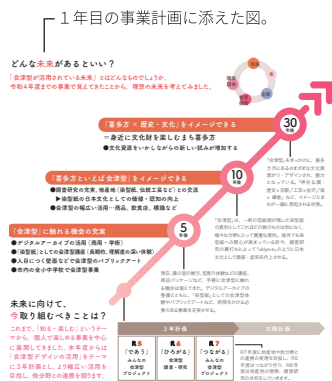
ふたつの軸をもとに、事業を進めるキーワードとして「リ・デザイン」という言葉を掲げました。それは、完成したものの本質を見つめ直し、現代の暮らしに合うかたちへと再構築するという

考え方です。デンマークの家具デザイナー、コエー・クリントが示した「伝統を切り離すのではなく真摯に向き合い、新たに作りなおす」というデザインの思想に学んでいます。

# みんなの会津型プロジェクトとは

喜多方市では、令和2〜4年度にかけて喜多方の染型紙「会津型」をとりあげ、「知る・楽しむ」をテーマとして事業を進めました。そこで見た会津型は、3万7千点近くある柄のなかに「暮らしを豊かに彩りたい」という人びとの素直な欲求や喜びが溢れるものでした。伝統柄、可愛らしい柄、おしゃれな柄、季節を表す柄、ユーモラスにも見える柄。それを地方で商いとして成立させたたくましさ。そこから、知識を得たり体験したりするという個人的にたのしむ枠を超える、もっと大きな広がり可能性と、そこに向けての責任に気がつきました。会津型には、そのデザインの魅力だけでなく、喜多方という土地の歴史ごと魅力を伝えられる力があるのではないかと、そうなるには、もっとできることがあるのではないかと。

そうしたことから、「会津型のデザインの活用」というテーマが生まれました。「個人的にたのしむ枠を超えて」「会津型のデザイン（デジタルデータ）の活用」を目指す、『みんなの会津型プロジェクト』です。



事業は県の補助を受けたこともあり、3カ年計画となりました。各年、さらに細い目標を設定し、サブタイトルとしました。

会津型×高校生1歳の里展ホリ・デザイン

6月3日 合同学習会 喜多方高校×桐桜高校×貝沼航氏  
① 会津型レクチャー  
講師・木幡江里子 (喜多方市教育委員会文化課学芸員)

- ② プロデュース論「会津の伝統・漆」を伝える」  
講師・貝沼航氏 (漆とロック株式会社代表)
- ③ グループワーク「わたしたちの会津型？」  
@蔵の里 20名

14日 会津型を彫る 喜多方高校×那須恵子氏

- ① 会津型の型選び・型彫りレクチャー  
講師・那須恵子氏 (型屋210 伊勢型紙彫師)  
@喜多方高校美術室 20名
- ② 型紙レブリカ制作  
講師・那須恵子氏  
@喜多方高校美術室 20名

16日 会津型で染める 桐桜高校×会津型研究会

- ① 糊置き  
講師・会津型研究会  
@染織工房れんが 10名
- ② 藍染め  
講師・会津型研究会  
@染織工房れんが 参加者・10名

9月16日 会津型を展示する 喜多方高校×桐桜高校×佐藤哲也氏

- ① 展示計画を考える  
講師・佐藤哲也氏 (ヘルベチカデザイン株式会社代表取締役)  
@蔵の里 11名
- ② 展示してみる  
講師・佐藤哲也氏・原忠信氏・筑紫マモリ・アサキ・鶴城准穂  
@蔵の里 10名

きたかた会津型ウィークー文化財×リ・デザイン

10月14日(土) 29日 展覧会 「柄をたのしむ、柄とくらす」  
@旧大森家 263名

- 14日 ポップアップストア 食べる・くつろぐ会津型  
@あづまさ別棟 91名
- 14日 ワークショップ 会津型×染×漆  
講師・原忠信氏・原ゼミのみなさん  
@あづまさ別棟 7名

15日 クロージングイベント  
伝統や文化のり・デザインを考えてみよう

- ① 成果発表 未来の会津型
- ② 対談 伝統工芸×リ・デザイン  
講師・岡本幸樹氏 (株式会社ハナコンサルティング代表取締役)  
那須恵子氏
- ③ 座談会 会津型×リ・デザイン  
講師・岡本幸樹氏・那須恵子氏・貝沼航氏・佐藤哲也氏・原忠信氏・森高一裕氏・会津型研究会  
@あづまさ別棟 30名

5月18日 関柴公民館事業「会津型を学ぼう」 @関柴公民館 20名  
26日 会津型を用いた産学連携事業オリエンテーション @オンライン 30名  
主催・榎ユニフォームネット  
6月1日 デジタルデータ使用規定の変更 「喜多方の染型紙(福島県指定重要有形民俗文化財「会津の染型紙と関係資料」)使用取扱要綱の変更」

9日 会津型うちわ作り体験 @喜多方桐桜高校 8名

20日 会津型オープンデータ公開  
21日 カリフォルニアの高校生との交流講座(うちわ作り体験) @喜多方桐桜高校 17名  
29日 会津支援学校教員への会津型講座 @会津支援学校 6名  
7月13日 塩川公民館講座「発見！和紙の魅力」 @塩川公民館 10名

9月3日 第62回福島県芸術祭「会津型缶バッジ作りブース」出展 @會津風雅室 130名  
6日 会津支援学校会津型ワークショップ陶芸班・リサイクル班 @会津支援学校 28名  
7日 会津支援学校会津型ワークショップ手芸班 @会津支援学校 13名

11月18・19日「会津型缶バッジ作りブース」出展(イベントコラボ) @きたかた産業フェア2023 92名  
12月7日 山都中学校会津型美術講座1年生 @山都中学校 5名  
山都中学校会津型美術講座2年生 @山都中学校 18名  
山都中学校会津型美術講座3年生 @山都中学校 10名  
13日 会津支援学校会津型ワークショップ陶芸班・リサイクル班 @会津支援学校 28名  
14日 会津支援学校会津型ワークショップ手芸班 @会津支援学校 4名  
1月16日 喜多方第三中学校会津型美術講座3年1組 @第三中学校 30名  
喜多方第三中学校会津型美術講座3年2組 @第三中学校 33名  
喜多方第三中学校会津型美術講座2年1組 @第三中学校 28名  
喜多方第三中学校会津型美術講座2年2組 @第三中学校 30名  
2月23日 喜多方第三中学校会津型美術講座3年1組 @第三中学校 30名  
喜多方第三中学校会津型美術講座3年2組 @第三中学校 33名  
喜多方第三中学校会津型美術講座2年1組 @第三中学校 28名  
喜多方第三中学校会津型美術講座2年2組 @第三中学校 30名  
2月20日 喜多方第三中学校会津型美術講座3年1組 @第三中学校 30名  
喜多方第三中学校会津型美術講座3年2組 @第三中学校 33名  
喜多方第三中学校会津型美術講座2年1組 @第三中学校 28名  
喜多方第三中学校会津型美術講座2年2組 @第三中学校 30名  
2月6日(土)3月3日 図書館パネル展への協力  
2月28日 「さわったのしむ会津型カタログ」・「さわったのしむ会津型パズル」制作  
令和5年度であうみんなの会津型プロジェクト記録集発行

旅する会津型I型紙産地の活用調査研究

- i. 7月24日  
～26日
  - 1 岩手県盛岡市 南部の染屋 小野染彩所  
伝統を担う商品づくりの思想と工程について
  - 2 秋田県鹿角市 藍染の型紙 鹿角市教育委員会  
鹿角に残る型紙の調査、その保存・活用について
  - 3 岩手県一戸町 南館家の型紙 一戸町教育委員会  
一戸に残る型紙の調査、地域における文化財活用について
  - 4 宮城県多賀城市 宮城の型紙 東北歴史博物館  
館所蔵の宮城県に残る型紙と、展示・公開の工夫について
  - 5 宮城県仙台市 仙台の染屋 永動染工場  
伝統産業の商品開発と継承、染師町の歴史について

会津型 × 高校生I蔵の里展示・デザイン後編

- i. 8月20日
 

会津型レクチャー 歴史を知ろう  
講師：木幡江里子（喜多方市教育委員会文化課学芸員）

ワークショップ 展示コンセプトをつくらう  
——デザイン思考を使ってみよう——  
講師：原忠信氏（筑波大学ヒジューラルデザイン領域准教授）

ワークショップ 展示計画をつくる  
@喜多方高校美術室 30名（美術部有志十一般参加者）

きたかた会津型ワークショップI文化財×リ・デザイン

- i. 10月5日  
～14日
 

展覧会「旅する会津型」  
@蔵の里 旧外島家住宅 459名
- ii. 12日
 

コラボワークショップ 学芸員とたのしみ会津型  
おみせまな技法で型紙をつくらう  
講師：小林直輝氏（東北歴史博物館民俗分野講師）  
@蔵の里 座敷蔵 14名
- iii. 12・13日 会津型で型染めをしよう——藍染め  
講師：御所野縄文博物館 中市日女子氏・木村由美子氏  
@蔵の里 座敷蔵と中庭 13名
- iv. 14日
 

会津型をまもろうI文化財保存整理入門編  
講師：蓮沼優介（喜多方市教育委員会文化課）  
@蔵の里 座敷蔵 16名

クロージングトーク 会津型をつなぐ  
講演会 型紙をつなぐIデジタルアーカイブの可能性  
講師：加茂瑞穂氏（武庫川女子大学文学部歴史文化学科講師）

座談会 会津型のつなげかた  
講師：岡本幸樹氏（株式会社ピハナコンサルティング代表取締役）  
加茂瑞穂氏（原忠信氏）森高一裕氏（会津型研究会）  
@蔵の里 座敷蔵 20名

- ii. 11月12日  
～13日
 

埼玉県熊谷市 熊谷染 熊谷市立熊谷図書館  
地域産業の歴史と収集・保存の取組について
- iii. 1月8日
 

兵庫県三木市 三木の染型紙 三木市立みき歴史資料館  
ギャラリー湯の山みち

埼玉県熊谷市 熊谷染 熊谷市スポーツ・文化村「まひあ」  
地域産業の継承・普及の取組について

個人収集を起点とした資料保存と文化財指定の経緯について

- 5月11日 御殿場マーケット会津型ワークショップ @御殿場公園 30名
- 16日 関柴公民館事業「会津型を学ぼう」 @関柴公民館 15名
- 6月4日 会津型ワークショップ（子ども劇場） @厚生会館 8名
- 7月4日 会津型を用いた産学連携事業オリエンテーション @オンライン 40名  
主催：㈱ユニフォームネット
- 8日 岩月公民館《会津型》講習 @岩月交友館 16名
- 20日 駒形地区公民館事業「駒形むつみ学級」 @駒形地区公民館 13名  
レトロna婚活（主催世話やき人会） @大和川酒蔵昭和蔵 13名

9月6日 郷土歴史講座「喜多方の染型紙『会津型』について」 @喜多方プラザ 21名

- 11月26日 会津型美術講座（座学・型彫り・年賀状づくり） @山都中学校 39名
- 12月2日 会津型美術講座（座学） @喜多方市立第一中学校 253名
- 9日 会津型美術講座（型彫り・カレンダーづくり） @喜多方市立第二中学校 91名
- 2月4日～3月2日 図書館パネル展への協力
- 24日 第6回郷土講座「図書館で「ひろがる」会津型」 @図書館 15名
- 28日 記録集「旅する会津型」発行

デジタルアーカイブに向けた庁内ワーキング会議

5月26日 第一回デジタルアーカイブに向けたワーキング会議  
旅する会津型 1 各地の電子保存を用いた調査・研究について

6月23日 立命館大学アート・リサーチセンター  
24日 取り組みや指針などについての聞き取りと、施設の視察

8月7日 東北生活文化大学 常盤紺型(仙台の型紙)  
電子的保存・修復、教育現場での活用について聞き取り

8月8日 東北歴史博物館「宮城の民具」  
民俗分野のデジタルアーカイブ事業に関する聞き取り

8月20日 第二回デジタルアーカイブに向けたワーキング会議

会津型×高校生 1 蔵の里展示リ・デザイン

9月4日 ワークショップ「小ネタ」を伝える方法を考えよう  
5日 | デザイン思考で「収束」してみよう  
講師・原忠信氏(筑波大学デジタルデザイン領域准教授)  
@喜多方高校美術室 12名

ワークショップ「プロトタイプビング」  
「形にしながら考える」

講師・原忠信氏  
@蔵の里 旧井上穀物蔵 10名

10月3日 展示リニューアル公開開始

高校生と会津型を語る会

5日 ● 高校生が先生！色差し体験  
● 高校生が学芸員！展示解説  
@蔵の里 20名

きたかた会津型ウィークー文化財×リ・デザイン

12月20日 喜多方市美術館企画展

11月18日

喜多方の染型紙『会津型』展  
ー雪国の四季とたのしみデザイン

12月21日 1. トークイベント

みんなでつくる明日の伝統ー  
デザイン思考で考える文化のつなぎ方

トークセッション「伝統」と「今」をどうつなぐ？  
講師・岡本幸樹氏(株式会社ハナコナルディング代表取締役)  
那須恵子氏(型屋HIO伊勢型紙彫師)原忠信氏/  
森高一裕氏(会津型研究会)

ワークショップ「デザイン思考で考える、文化の未来」  
ファシリテーター・原忠信氏

1月10日 2. トークイベント

喜多方のデジタルアーカイブをつくらうー

地域文化を育む、デジタルアーカイブの新たなカタチ  
基調講演

みんなのデジタルアーカイブ『宮城の民具』ができるまで  
講師・小林直輝氏(東北歴史博物館民俗分野技師)

パネルディスカッション「地域文化のデジタル化の今」

講師・加茂瑞穂氏(武庫川女子大学文学部歴史文化学科講師)  
川又勝子氏(東北生活文化大学家政学部家政学科教授)  
小林直輝氏

座談会 喜多方のデジタルアーカイブをつくる

17日 3. 学芸員による展示解説会

4月15日

テクノアカデミー会津「旅行業務実習」@テクノアカデミー会津 15名

5月15日

関柴公民館事業「会津型を学ぼう」@関柴公民館 16名

6月20日

会津型を用いた産学連携事業オリエンテーション @オンライン 52名  
主催・(株)ユニフォームネット

7月25日

アイデミきたかた魅力発信事業会津型工作イベント @アイデミきたかた 300名

8月25日  
9月1日

会津型を使ったうちわ作り 座学 @姥堂公民館 20名  
喜多方市内合同研修「会津型」@大和川酒造昭和蔵 35名

17日  
18日  
20日  
25日

歴史おもしろ塾「会津型の歴史と今」座学 @会津若松市中央公民館神指分館 20名  
1学年総合的な学習「地域の特色を知ろう(郷土理解)」@喜多方三中 10名  
喜多方市少年少女発明クラブ会津型の座学・体験 @中央公民館 20名  
淑徳大学喜多方実習「小田付伝建地区・会津型について」@会陽館 9名

10月8日  
11月21日

歴史おもしろ塾「会津型の歴史と今」現地研修 @蔵の里 20名  
会津地区社会教育研究大会事例発表(会津型) @喜多方ラザ 50名



EXHIBITION



TALK EVENT



workshop

## 共有と参加

きたかた会津型ウィーク

文化財の価値を損なわないために、その魅力を伝える必要があります。ものとしての美しさ、時代を語る佇まい、じっくり観察することで見つかる発見など、本物に触れることでしか得られない美しさがあります。そして、デザインを活用できるのは、本物があつてこそなのです。

その機会を作ること、そして、ともにたのしむ場として、本事業の前身となった事業で開催した『きたかた会津型ウィーク』を引き継ぎ、参加型のイベントを毎年行うこととしました。イベントの構成は、本物に触れる機会としての展覧会、会津型や文化財について考えるトークイベント、手や頭を動かしたのしむワークショップの3つとしました。

# R5

## であう

前年度の事業を通して、文化財に指定された頃の会津型のイメージが、長く固定されたままであることを課題として感じました。現代の暮らしへとつなげていくためには、これまでとは異なる人や分野との出会いが必要だと考えました。

そこで、前年度に生まれたつながりから、染型紙や伝統的なもののリ・デザインに知見のある方、グラフィック・デザイナーに力を借りることにしました。そして、会津型が長く愛されるために、“未来の大人”の視点が必要だと考え、地域の高校生たちにも参加を呼びかけました。

文化財としての価値を損なわないために

# 01



| 展覧会「柄をたのしむ、柄とくらす」の様子。小田付伝建地区の伝統的建造物となっている旧大森家を会場としてお借りしました。

「きたかた会津型ウィーク」が始まるまでの間、高校生とともに、さまざまな分野の講師を迎えて「会津型をどう伝えるか」を考えるプロジェクトや、支援学校のみなさんと進めた取り組みなど、いくつかの試みを重ねました。期間中のトークイベントは、それらを発表し、振り返る場として開催しました。会場を見渡すと、伝統、教育、商業、福祉、デザインなど、さまざまな分野に関わる方々が顔を揃えていました。当初は想定していなかった分野や立場

を越えたつながりも生まれていることに気がつきました。

筑波大学芸術系の原忠信先生とゼミのみなさんが企画したワークショップでは、参加者が自由なテーマで柄をデザインし、交換し合うことで柄を完成させました。新しい柄を生み出す発想はこれまでの会津型の活用にはないもので、すでに産業として役割を終えた会津型だからこそできるものでもありました。しかし同時に、「どこまでが文化財の活用なのか」という問いも生まれました。



| 筑波大学芸術系の原忠信先生とゼミのみなさんが企画してくださったワークショップ。大人も子どもも混ざって楽しい時間が過ぎました。文化財活用の核心をつく課題と向き合うきっかけをくれました。

展覧会では、会津型の「柄」を、さまざまな時代の喜多方で見つけた「柄」と並べて紹介しました。例えば、縄文土器と小紋柄や、彼岸獅子（地域の伝統行事）の衣装の柄と波の文様など。さまざまな時代を彩ってきた「柄」は、今日の私たちの暮らしの中でも楽しむことができます。身近に息づく文化財を感じてもらおう展示を目指しました。



上：那須 恵子さん（型屋 2110 伊勢型紙彫師）による型彫りの実演を見学。  
下：会津型研究会のみなさんと型染めに取り組みました。

トクイベントで発表してくれた高校生。



## R6

## ひろがる

会津型には、学術的な視点からの整理という課題もありました。前年度の事業で見えた「どこまでが文化財の活用なのか」という課題からも、保存・活用に焦点を当てることとしました。

かつて型紙は行商によって各地へ運ばれ、その過程で「商印」と呼ばれる印が押されました。商印は、どこを通過したのかを示すものです。行商のルートは全国におよび、会津型も遠く北海道まで販売されました。現在も、喜多方の商印が押された型紙が、かつての販売先に残されています。

本事業では、この商印を手がかりに、型紙が各地でどのように受け継がれて



御所野縄文博物館の中市日女子さんと木村由美子さんによる型染め体験。みなさんが楽しく参加しているなかで、おふたりがどんな工夫をされているか目を光らせる文化課でした。



ワークショップの空気にも慣れてきました。

旧外島家での展覧会。施設の新たな活用も広がっています。



囲炉裏を囲んでのトークイベント。



きたのかを調査しました。商印のある型紙の残る土地や型紙産地を訪ね、それぞれの取り組みについて伺いました。

今年度の展覧会では、「旅する会津型」の中間報告としての成果と、高校生たちとの事業について紹介しました。会場は、喜多方蔵の里にある旧外島家をお借りしました。

ワークショップでは、視察先で繋がりを持つことができただけでなく、講師としてお呼びして、型彫りや型染めの体験を実施しました。伝統的な技法を体験できる工夫などを取り入れ、いつもと違った体験を提供してくださいました。型染めの体験では、蔵の里に設置されている水路を使って作業を行いました。この水路は、

かつて喜多方のまちで生活になくはならないものであった「中掘」という水路をモチーフに作られたものです。昔の暮らしに思いを馳せながら、喜多方の文化に触れる時間。「文化課としてしかできないこと」が、また一つ見えた気がしました。

トークイベントも、旧外島家の囲炉裏に火を灯して行いました。デジタルアーカイブを活用した型紙研究についての講演や、令和6年度を振り返り、最近の取り組みなどをディスカッション。囲炉裏を囲み、煙の向きを気にしたり、ときどきはざる炭に目を向けたりしながら、参加者のみなさんと語り合いました。

## R7

## つながる

さまざまな取り組みを進めるなかで、デジタルデータの活用申請や問い合わせが増えてきました。その一方で、文化財としての価値を守りながら、会津型をどのようにひらいていくかという課題も、より具体的に感じるようになりました。さらに、トークイベントなどでもデジタルデータを用いた保存・活用についての可能性が広がりました。こうした背景から、文化財の保存・活用について、デジタルデータを主軸とした調査や視察を行いました。各機関の役割や方針、実践での課題まで、詳細にお聞きすることができました。また、デジタルアーカイブに向けて、



喜多方市美術館での展示の様子。

庁内の関係各課と連携して勉強会を行いました。どんな使い方ができると生きたデジタルアーカイブになるか。整えた体制を活かし、外部とも連携しながら基盤づくりを進めていきます。

三カ年事業の締めくくりとして、喜多方市美術館で「会津型展」を開催しました。美術館の収蔵作品と並べること、喜多方の風土や会津型が道具として生きていた時代を感じてもらおう展示を目指しました。地域の風土と結び直し、文化財としての価値をあらためて伝えるとともに、三カ年の成果を確認する節目となりました。

そして、喜多方蔵の里の会津型常設展示のり・デザイン

事業も最終年度を迎え、みんなの手を動かし、考えてきたアイデアを形にすることができました。この事業では、1年生で型彫りや型染めの制作を体験した生徒たちが、2年生・3年生になり、その経験を土台に、展示のコンセプトや方法を考えました。専門家からレクチャーを受けながら、会津型を肌で感じてもらう時間となっていたなら幸いです。より確かな理解とともに、地域の文化や会津型への愛着が育まれたことを願うばかりです。こうしたことを考えてきた痕跡は、会津型にとっても、道具としての形や使い方の整理だけでなく、現代との結びつきを再発見する大切な一歩となりました。



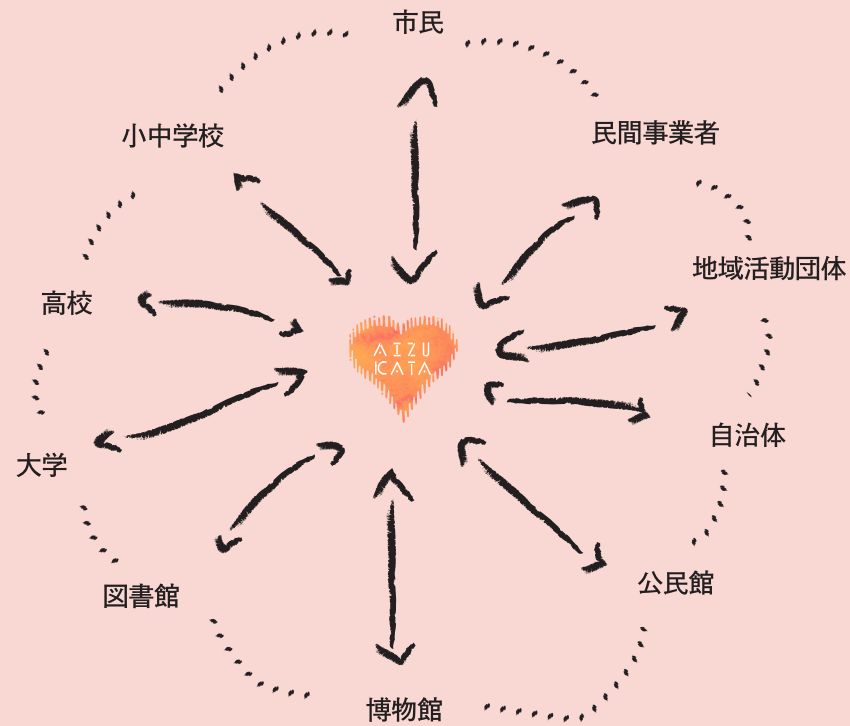
これまで事業に関わってくださった喜多方高校美術部のみなさんに講師になっていただき、ワークショップや展示解説をしてもらいました。たくましく成長していく姿を見ることが、事業を続けていく原動力となり、何よりの喜びでした。



伝統と今をテーマにしたトーク1。



トーク2のテーマは地域文化を育むデジタルアーカイブとしました。



## 分野を越えて

他分野との協働事業について

事業のはじめに思い描いた会津型や文化財が活用されている未来は、そのデザインが市内外のさまざまなところに活用され、デジタルアーカイブが商用だけでなく学術にも利用され、染型紙の価値が文化として広く大切にされている姿です。こうした未来へ文化課の力だけで辿り着くのは、決して容易ではありません。

そこで、「きたかた会津型ウィーク」と並行して、他分野への働きかけや、共に進める事業に力を注いできました。教育、福祉、学術、商工、観光など、分野に焦点を当ててふりかえります。



高校生と大学生、そして大人も一緒に考えました。  
世代を越えて文化財について話し合う、夢のような時間でした。

事業を通して3年かけて完成させた喜多方蔵の里の会津型常設展のリ・デザイン。地域の高校生たちにも力を貸してもらいました。商品プロデューサーや型彫り職人など、さまざまな専門家と一緒に、「地域の歴史をどう伝えるか」というテーマに取り組みました。

筑波大学芸術系の原忠信先生には、自由にアイデアを出し合いつながりながら課題を考える創造的な思考法、「デザイン思考※」を使ったワークショップを開いていただき、毎回ゼミ生のみならずにもサポートしてもらいました。高校生たちは、高校ではなかなか触れることのない思考法

を体験しながら、意見を出し合ったり、ときにレゴブロックで形をつくってみたり（←）して、考えを深めていきました。大学生のみなさんが伴走してくれたことで、「少し先の自分」を重ねながら学ぶ時間になり、アイデアを生み出す楽しさを体験してくれました。3年間を通して、高校生たちはどんどん発言が積極的になり、成長する姿を感じました。

知識を得るだけでなく、考えたり話したりする深い学び。こうした時間をみんなと一緒に作り上げていくのも、文化事業の楽しさです。今後も大切に続けていきたいと思えます。

※デザイン思考とは、人への共感を出発点に、唯一の正解がない“ウィキッド・プロブレム”に向き合い、より良い未来を目指す方法。共感・問題定義・発想・試作・テストの5つのプロセスを繰り返し改善しながら課題に取り組む考え方。

### 会津型講座

さまざまな形で会津型の講座を行っています。基本的に、座学と型彫りや色さしの体験がセットになっていて、子どもから大人まで、その日の対象に合わせて、お話しするテーマや紹介する柄を考えます。

市内のいくつかの小中学校では、定期的に会津型講座が取り入れられています（※会津型研究会が講師をされる講座もあります）。中学校の講座に出かけたとき、「小学校で型彫りしました」と話してくれる生徒さんに出会うこともあり、少しずつ会津型が身



近なものとして重なっていく様子を感じます。

型彫り体験の時間がはじまると、不思議とみんな驚くほどの集中力を見せてくれます。会場全体が静まり返るくらい黙々と手を動かす姿は、

先生方からも驚かれるほどのです。こうした時間が、会津型と出会う原体験として、心に残っていったらと思っています。参加者の方と直接お話しできる場として、いつも多くの気づきをもたらえます。

### 学生の受け入れ

令和7年度には、淑徳大学 地域創生学部 内山大介教授のゼミ実習を受け入れました。市内の重要伝統的建造物群保存地区「小田付地区」の視察などとともに、会津型の講座、蔵の里のリ・デザイン実装のための会場整備や、資料整理の体験などにも取り組んでもらいました。保存活動の裏側に触れていただく時間は、喜多方に残る歴史文化資源があつてこそ可能な取り組みです。



## 福祉

### 会津支援学校



型彫り体験の成果発表。積極的に参加してくれた生徒さんたち。

福島県立博物館からお声掛けをいただき、地元の文化「会津型」を会津支援学校の授業に活かす取り組みを行いました。

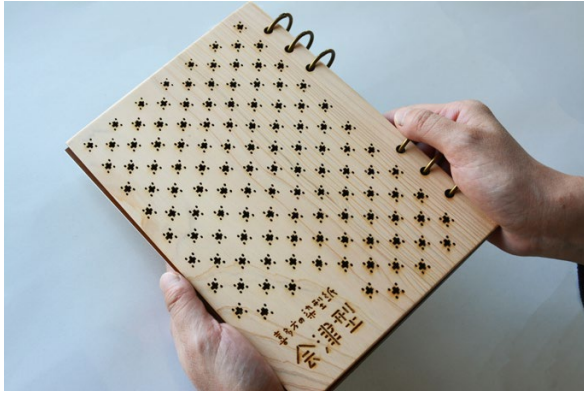
当初は、魅力をうまく伝えられるだろうかという不安もありましたが、生徒の皆さんと関わる中で、会津型は多様な能力や関心に応じた展開ができることに気づかされました。

「知る・デザインする・彫る・色をさす」と工程を分けることで、一人ひとりが自分なりの形で制作に参加することができました。集中して作業を進めるのが得意な生徒が、隣の先生よりも早く仕上げてしまう。そんな驚かされる場面もありました。色さしでは、思いもよらない大

胆な色づかいもあれば、丁寧に重ねる表現もありました。彼らがお互いに讃えあう姿に、文化財を囲んで生まれる「理想的なかたち」を教わった気がします。また、普段は一人で作業することが多い生徒が、同じ机で最後まで制作に取り組んでくれたことも印象に残っています。

この取り組みを通じて、「文化財の活用」は視点や切り口を柔軟に変えることで、さまざまな人に寄り添う可能性を持つていることを改めて感じました。多様な個性や力を受け止め、引き出す存在になり得る。その可能性に出会えたことが、今も私たちの歩みを支えてくれます。

### さわれる会津型カタログ



レーザー加工で制作した表紙。手で彫られた染型紙とは質感が異なりますが、米紋のひとつひとつ異なる表情まで再現されています。

会津型のデザインを指先で楽しんでいただくための、特別なカタログを制作しました。

本来、文化財である会津型は、保存の観点から実物に触れることが叶いません。長い年月を経て深みを増した渋紙の色艶、一枚一枚異なる背景を持つ「反故紙（ほごがみ）」が重なり合った質感。本物が持つその美しさを完全に再現することは不可能です。それでも、写真だけでは伝わらない「手触り」を、少しでも届きたい。そこで、レーザーカットで文様を掘り抜く手法を採用しました。指先で柄をなぞり、その構造を体感できるこの一冊は、はじめて会津型に触れる方への新しい入り口になります。

現代の暮らしをテーマに柄を紹介しました。

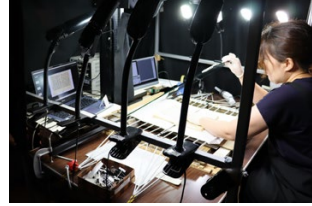


「触って楽しむ」というこの試みは、福祉の現場でも新しい可能性を広げてくれるのではと考え、福島県立視覚支援学校へお届けしました。

歴史ある文化財を、ただ遠くから眺めるものにするのではなく、多様な背景を持つ方々へ届けていく。このカタログが、そのための大切な一歩になればと願っています。



## 学術



私たちは今一度「学術」という視点から会津型を見つめ直したいと考えました。どのような切り口で進めるか悩みながらも、視察や調査を通じて、研究者や他産地との繋がりを作ってきました。

立命館大学アート・リサーチセンター（以下ARC）では、デジタルアーカイブの先駆者である赤間教授から、直面する課題や今後の展望まで多くの示唆をいただきました。施設の視察

では「正確な情報を残す」という方針の徹底を目の当たりにしました。資料を傷めず、一人で正確に撮影するための手作りの台や、足元でシャッターを切るためのキーボード。さらにデータの取り扱いやシステムに至る細やかな工夫の数々。高い専門

性と実戦の繰り返しによって作り上げられた現場に圧倒されました。

こうしたARCでの学びや、これまで巡った各機関がそれぞれの背景の上に培ってきた保存・活用のあり方に触れることで、私たちは自分たちの現在地を知り、進むべき指針を学ぶことができました。いつか地域や分野を越えた大きな文化のうねりとなることを願って、今後もこのネットワークを大切に育んでいきます。

地道な動きは、新しい世代にも届き始めています。近年、学生さんが会津型を論文のテーマに選んでくれるケースが増えてきました。研究成果を市役所のホール棟に展示してもらった際には、文化財が現代の中で新たな意味を持ち始めていることを実感しました。



## 商工

近年、パッケージデザインにとどまらず、カプセルトイの商品開発やオフィス空間への採用など、企業による独自の活用が増えてきました。行政の枠を離れた場所では会津型が磨かれ、人々の目に触れる機会が増えていくことは、地域文化の注目度を高める上で大きな意義があると感じています。

こうした動きが広がる今、文化を預かる行政として挑戦しなければならぬのは、「文化」を軸にした商工連携です。これまで培ってきた、会津型が持つ歴史的背景や物語を尊重し、その価値を高めていこうとする繋がり。それらが街の景色に溶け込むような展開を、丁寧に形にしていきたいと考えています。



会津型研究会のカレンダー。伝統的な素材を用い、ひとつひとつ手彫りの型紙で色差して作られています。



会津型のデザインが活用されたグッズ。

## 観光



枝垂れ桜のなかでガイドする学生。

観光分野でも、ウォーキングイベントの記念バッジにデザインが採用されるなど、少しずつ広がりを見せています。また、観光デザインを学ぶ学生が、街歩きガイドの際に会津型のデザインを使用したり、おみやげや絵ハガキを配りながら会津型を解説したり、会津型をテーマとした体験型の観光プログラムを考えて提案してくれたり、若い世代が地元の歴史文化に着目し、工夫して伝えようとしてくれる姿もありました。

## ふりかえり

### そして、これから

3年間の取り組みを通じて、いくつかの重要な気づきがありました。

継続して実施してきたウィークでは、展示で実物を見ながら、講師を招いて話し合う、いつもとは異なる視点や体験に触れる時間を市民のみなさんと共有することができました。その意義は、本文でも触れたとおり、似ているようで少し異なる存在と出会うことで、違いを見つめ直し、自分たちにとって何が必要なのかを考える契機となったことです。

例えば、会津型は、主要産地であった伊勢や京都とは異なり、地方の型紙商の資料がこれほどまとまって残っている例は他にありません。まだ詳細な調査・研究をしきれない資料のなかに、何月何日にどんな作業をしたか、この日は半休をとりました、といった記録や、彫り方の指示に使われたと思われる型紙も残されています。それらをさらに読み解き、中央とは違った生産体制の工夫や、そこに見える暮らしの痕跡を明らかにできるのは、会津型ならではのことなのです。

このことは、違いを知るなかで発見できました。さまざまな分野にであうことは、これからも大切にしていきたいポイントのひとつです。

また、他分野との協働を重ねる中で、多様な切り口を持つことが新たな繋がりや展開を生むことも実感しました。その一方で、「文化の敷居を下げること」と「本質を守ること」の間にあるジレンマも浮かび上がってきました。会津支援学校との取り組みでは、さまざまな背景を持つ人

にも楽しんでもらいたいという気持ちから、「知る・デザインする・彫る・色をさす」と工程を分けたり、柄を拡大して使用するなどの工夫をしました。しかし、こうした自由な活用には、「本質をどこまで伝えられているのか」という疑問も同時に感じました。受け取る側は、無限に自由であってほしい。そのために、手渡す側には、その活動が文化の全体像のどこに位置しているかを理解し、説明できなければなりません。裏付けを確かなものにしていくことで、文化の本質を損なわずに、自由な体験を安心して届けることができます。このことから、学術という分野から会津型を見つめ直す必要があるという思いをより強くしました。

また、近年増えてきた商用利用等への問い合わせなどから、権利保護という新たな課題も見えてきました。制度の面からも守っていく。そのために関係する方々と対話を重ね、納得できる仕組みづくりを模索することも、避けて通れない次の一歩です。

そして、はじめは保存・活用の観点から繋がった立命館大学アート・リサーチ・センター。詳細にお話を伺うことで、デジタルアーカイブの新たな可能性に気がつくことができました。まずはこれまで進めてきたネットワークや経験を活かし、どのようなデジタルアーカイブが必要とされるのか、みんなが楽しめるものにするために考えていくことが目下の展望です。

## この本を手にとった みなさまへ

この記録集を手にとった  
いただき、ありがとうございます。  
います。

喜多方の染型紙「会津型」という文化財を、どのように現代でいかし、輝かせていくのか、模索しながら歩んだ3年間。積み重ねた日々のすべてが、かけがえない宝物になりました。

会津型は、これまでも市として大切にしてきた魅力的な地域資源です。しかし、その価値をどのように未来へつなぎ、より多くのひとびとに実感してもらえる形にできるのかという問いに向き合うことは、決して簡

単ではありませんでした。

悩み、試行錯誤しながら進むなかで、ともに考え、いつも背中を押してくれたのは、プロジェクトに関わってくださった一人ひとりのみなさんです。会津型研究会のみなさんをはじめ、それぞれのフィールドで活躍される講師のみなさんが、専門性と創造性をもって新しい可能性と一緒に探し続けてくださったこと、そして分野・世代・地域を超えた「みんな」がそれぞれの形で会津型をたのしんでくださったことに、心から感謝申し上げます。

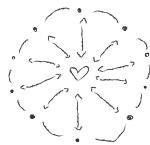
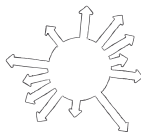
ワークショップや講座、

展覧会など、さまざまな場面でみなさんと直接お会いし、会津型に触れていただく時間は、私たちにとっても大きな喜びでした。季節の移ろいを感じながら、手を動かし、考え、語り合う——そんなひとつひとつの瞬間が、会津型の魅力をより深く伝え、また私たち自身のやりがいにもつながっていきました。こうした時間を、これからも大切に積み重ねていきたいと考えています。

一方で、デジタルアーカイブの構築や運用体制の整備、教育・研究機関との連携、市民参加の場を継続す

るための仕組みづくりなど、これから取り組むべき課題も明確になってきました。これらは、会津型をはじめとする喜多方の豊かな歴史文化資源を、次の世代へ確かな形で手渡していくために、欠かせない重要なステップです。

この記録集が、会津型の奥深さやプロジェクトの広がりを知るきっかけとなり、みなさんとともに未来へ向けた新たな一歩を考える手助けとなれば幸いです。これからも、会津型を通じて生まれる出会いや学びが、喜多方の文化を育み、まちの力となっていくことを願っています。



令和7年度 喜多方市文化芸術創造都市推進事業  
「つながる」みんなの会津型プロジェクト  
みんなの会津型プロジェクト 記録集

視察調査 木幡江里子、蓮沼優介、江畑芳  
編集 木幡江里子、江畑芳  
テキスト 木幡江里子、江畑芳  
デザイン 江畑芳  
撮影 木幡江里子、江畑芳  
印刷 有限会社五十嵐印刷  
発行 喜多方市教育委員会 文化課  
〒966-8601 福島県喜多方市字御清水東 7244 番地 2

令和7年度 福島県地域創生総合支援事業（サポート事業）